

## 世界遺産の島、ラム -- ケニア(フォト・エッセイ)

著者	桜木 奈央子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	136
ページ	47-50
発行年	2007-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005330">http://hdl.handle.net/2344/00005330</a>

# 世界遺産の島、ラム—ケニア—

写真・文  
桜木奈央子  
Naoko Sakuragi



海は、マングローブの緑と鮮やかな空の青を映し、緑でもなく青でもないような、不思議な色をしていた。その海の上を、ダウ船と呼ばれる丸太をくりぬいた小さな帆船でゆく。むかうのは、ケニア、ラム島。ケニアの空の玄関口、ジョモ・ケニヤッタ空港から首都ナイロビまでの途上では、運がよければキリンが見える。どこまでも続くアフリカの大地に、ホウオウボクの木シルエツト。アフリカにきた実感がこみあげる風景だ。

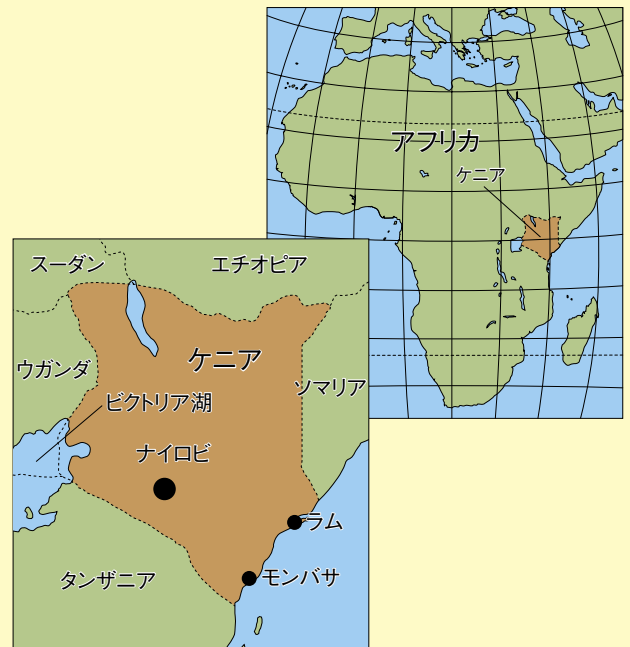
ナイロビから東へ五〇〇キロ行くとモンバサの町がある。エメラルドグリーン的大海と、熱帯特有の肌をびったりとはりつく空気が。そこからはアラブの文化に多大な影響をうけた、スワヒリ文化の香りが漂う。スワヒリとは、アラビア語で「海岸に住む人」という意味の言葉だ。

そのモンバサから約半日バスで北へ行き、さらに一時間ほど船に乗ったところにラム島がある。世界地図では見つけることがむずかしい、小さな島だ。アフリカの大地から、ずいぶん遠くに来たような気になる。

小さなダウ船でラム島に上陸する。

ラム島の旧市街、ラムタウンは、二〇〇一年に世界遺産として登録された。町には、中世イスラムの文化がそのままの形で残っている。石畳の道、木彫りで装飾されたドアなど、古い歴史の香りが漂う。

島には車が一台しかない。車があったと



しても、通れるような大きな道はない。交通手段はロバ。島の道は、すれ違うときにロバの体温を感じられるほどの細い路地がほとんどだ。

コフィアとよばれるイスラム帽をかぶった男性たちが、海に反射する光に目を細めながら、アラビアンコーヒーをすすっている。「ハバリガニ?」(ごきげんいかが?)とのんびりとした口調で話しかけてくる。足元で猫があくびをしている。

旧市街に一步足を踏み入れると、そこは、中世イスラムの世界。かつて、侵入者から町を守るためのものだったこの細い路地は、迷路のように入り組んでいる。その中にモスクが多数あり、どこからともなくコーランを唱える声がきこえてくる。

曲がり角から、裸足で走りまわる子供たちが飛び出して、私にぶつかる。ゆったりと荷物を運ぶロバの鼻息が、腕にかかってくすぐったい。さっきあいさつをかわしたおじさんとまた出会って、微笑みあう。路地を歩くと、そんな嬉しい偶然がたくさんある。

ラムタウンは一四〜一五世紀に形成された。そのころにストーンハウスと呼ばれる石の建造物が建てられ、また、アラブ世界との交易で栄えた。一八世紀になると、ヨーロッパからの武器、アフリカ大陸からの奴隷、西インド諸島からの砂糖やスパイスを交換する三角貿易が発展し、ラム島はアフリカ大陸から新大陸に送られる奴隷の中





継地点になった。悲劇の奴隷貿易の歴史。内陸から連れてこられた奴隷たちの目に、アフリカの大地から遠く離れた、この小さな島はどんなふう映ったのだろうか。

そんなことを考えながら歩いていると、道に迷ってしまった。どうやら、旧市街をぬけて、島の反対側にあるマトンドーニ村にきてしまったようだ。旧市街の雑踏からは遠い、生活の場所だ。

家の軒先で、子ヤギを抱く女性がいた。「この子は私たちにとつてすごく大切なヤギなのよ」と言いながら、本当に大切そうにヤギを抱いていた。それを見ていた、息子らしき少年もにっこり笑った。

静かな村の中に、大音量でスワヒリ音楽が流れていた。そこはカセットテープを売る小さな店。壁一面に、色とりどりのカセットテープが並べられている。店番をしている小さな兄弟が「ジャンボー」（こんにちは！）と元気よく挨拶をする。「なにか聴きたい音楽ある？これは？これは？」と、伝統的スワヒリ音楽から最新のヒットチャートまで、次々と音楽を流してくれる。

ラムは小さな島なので、どこからでも海が近い。いつのまにか石畳の道はとぎれ、砂浜の上を歩いてきた。サンダル底から、太陽に熱された砂の温度が伝わってくる。海沿いにある小さな学校は、ちょうど放課後を迎えたばかりで、子供たちでごったがえしていた。木からもぎとったオレンジ色





のマンゴーを、少年が私に手渡す。

マンゴーをかじりながら、海を眺める。太陽の光が反射して、揺らめいていた。波の音に混じって、村から母親が子供を叱る声や、ニワトリの鳴き声が聞こえた。大きなマンゴーの木からは小鳥のさえずり。

穏やかで、平和な時間。奴隷貿易の悲しい歴史は完全に過去のこととなり、島は静寂に包まれている。

その昔、新大陸に連れて行かれた奴隷たちや、過酷な環境の船中で命を落とした奴隷たちの魂も、この島でなら、ゆつくり安らぐことができるだろう。

海沿いに歩いて、旧市街に戻る。黄昏時のラムタウンは、最も活気がある。ムシカキ（肉の串焼き）や魚のフライ料理を売る屋台が出て、あちこちからいい匂いの煙が昇る。黒いブイブイを着た女性たちが、連れ立ってカンガ（東アフリカの布）の店に入っていく。男性たちは、路地に机を出して古いスワヒリゲームに夢中だ。子供たちはあいかわらず裸足で走りまわっている。そのうちアザーンが流れ始め、モスクからは祈りの声が聞こえる。島全体が祈りに包まれるようだ。いつの間にか太陽が沈もうとしている。

コーランを小脇に抱えた少年が、モスクに続く細い路地を元気よく走っていった。

（つづらぎ） なおこ／フォトグラファー